

一部短艇遠航記：附録

雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 9
ページ	[附] 1 - [附] 9
発行年	1913-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2298/6442

附 錄

一部短艇遠航記

ヤントヤン々々、團十郎さんのわんどで、舟は下繪津に出る。仰げば何か事でも起つた如に雲の幾群が押すな押すなで轟々と西へ西へ走つて行くが湖面は水鳥の夢をのせて静かなものであつた。田中君湖の眞只中で、鹽谷判官を演じたが、九寸五分ならぬ一丈何尺の獲物では大丈夫由良助ねをかりしの悲嘆もなく、先づは無事で流れに乗つた舟はスーソー威勢よく下つて行く。

「學生さあーん」、舌だるい聲に暫し擡の手を止めると、堤吹く風は寒からうに滿面春色を漲らした、羅宇屋見たいな四十男が此方を向いて叫んで居る。「此の筆一本買つてくんな。呉れると思つて買つてくんな。今夜の宿賃だけで好いから呉れると思つて買つてくんな。四十錢位になー」、此方は面白がつて、買ふとか買はぬとか、褒めたり貶したりとど田中君大聲で、「泳いで來い」と怒鳴つた。「其んなら泳いで來うか」と奴さんそう々々帶でも解きそうに爲るので、ドクトル君大に心配したした、「酔つて居るから眞個にはいると大變だ。買はぬぞ々々、みんなサア行かう」と促がし立て、酔がまわつたのか今夜のやどりが氣になるのか、グツタリと荷の上に打俯したのを後に見捨てゝヤントヤン「ありや屹度下りもんぢやが」とドクトル君の眼鏡が光る。冬枯の木立も痛々しげな水面の振ひも、のんびりした心には長閑に映る。數時間前まで青息吐息

五色の息をつきながした連中も一旦あの懐かしい如な又恐ろしい如な建物を離れると、籠から飛び出した小鳥見たいに無暗に歌でも怒鳴りなくなつた。夕目に紫色に肌を染めた金峯は或は左に或は右に見えたり隠れだりする。「汽車の窓から見た富士が彼の通りでね右手へズとかう聳ねてるかと思ふと左の山の上から、チヨツポリ覗いていて」と誰やらが得意になつて喋舌りたてるとたん、「捨子ッ」ドクトルは突拍子な叫を發して急に腰を上げた。吃驚した眼にドクトルの指す方を眺むれば碧の水濞かにめぐる洲の一隅に何やら白いものに包んだ物體が置いてある。「何あんの事だ馬鹿らしい」と笑ひ消した万五郎さんの一言にドクトルやつと尻をもちつけはしたものゝ喉のあたりへ何か引つかゝつてゐる居るように徹底せぬ顔付であつた。其の事を考へるのかドクトルは何となく浮かぬ顔色「サアもう考へは止めた々々」「まあ君見たまへ夕方の空は奇麗ぢやないか」「鳥がこんでゆくぞ」「あの竹籜の中でチヨン々鳴いてるのは山鶯かいなに黽だ々」「わい叔母さんつめたからう」潺湲と流るゝ水を掬んで夕餉の仕度に手を眞赤にした叔母さんはへーと言つて顔を上げる。舟に起つた波はサア々と彼女の足下に押して行つて美しい夕焼を背景にした映像はチラチラと碎けた。黄昏の色が仄かに漂うて赤い灯が点り初める。砂利船の間を縫うて舟はやがて川尻に入る。例の鰻屋の石垣下に纜つた。薄灰色の白壁が高く見上げるばかり建てつらなつてヒタヒタと舷に鳴る漣、魔の船の如にスーと下つて行く小舟、黒ずんだ橋「何だか西洋の小説にでもありそうだ」と階段を上り上り話して行く。疲れをすつかり風呂に流して陶然とした氣持に鰻を呼び飯を呼び腹が滿つればやがて睡くなる。旅館に案内して貰へばわかみさん意外の大入にホク々喜んで御座つた。呉れ々も五時半に起してくれと念を押して床を取つて貰ふ。「月が好いぞ月が好いぞ」と團十郎さんの呼ぶ聲に「ドレ」と縁端に飛び出せば、照りたりな月皓

々千里、流れたりな清光水の如く、風をさまり雲消けたる空には星影うすく、脚下に淙々音を絶たざる流には小鱗時に、潑刺銀沫を飛ばす。漂渺として薄絹の如き霧に包まれたる連山は阿蘇あたりであらう、讀摩これを久うして席に歸れば燈火光細うして鼾聲既に高かつた。煎餅蒲團に外套やら何やら苟くも暖を取るに役立つものはありつたけ載せ懸けて、床に入るは入つたが、肩が寒いと少し引きあぐれば足首まで出て了ふし下へ踏みやれば胸もあらはになるし龜の如に首をすくめ足をちいめ母胎滯在中其の儘の昔に還つて破れ勝ちな夢を結んだ。以上廿四日、

十二月廿五日、宿のわかみが「最早時間で御座います」と起しに来る。「オイ」と眞先に跳起きた團十郎さん床離の思切よかつた事古今未曾有で今日の天氣は好からうぞ。戸を繰つて顔を出せば落ちかゝつた月は寒さうに懸つて朝の風が針の様に肌に徹へた。行くべき今日のとまりはと遙に輝く星を見て居ると「サア行かう」と言ふので外套スツポリ頭から被つて飛び出す。寸も積つた霜を拂つて用意萬端整へばいざとばかりに漕ぎ出し冷たく睡つた町も直ぐ後になる。バツと掛つた飛沫に肩の手拭取つて押し拭へば、オ、痛、手拭はスツカリ凍つて居るのだ。寒い風に抵抗して肌の筋肉が一時緊縮する様に覺ゆるが其の鋭い冬の心持の中にも或る快感が湧いて来る。下るほどに月は益々傾いて東空も淡すりと卵色にばかされ初める。川の淺瀬が折々氣味の悪い響を立てゝ舟底を磨る。やがて太陽が大きな顔をして憚もない大空にヌツと昇つて行く。月ほど見ると日に氣壓されて一秒一秒に消ねて行く、何だか可哀相で耐らなかつた。二丁で蜜柑を買ひ込む。満潮で随分困難したがヤット河口を通り抜けると幸ひに追手だ。金峯や温泉がコウ漂渺とかすんで清少納言にでも

見せたら「冬は曙山々やうやうあかるくなりゆく追手うけたる白帆三つ四つ二つ走りたる、透きたる水面に小さき皺のひたひたと舷を訪れたるいといみじ」位は言ふ所だ。住吉の岬を廻れば三角の吊鐘岩は早や其處と指さされる。赤瀬や網田には朝餉の煙が立ち迷ふ。鷗が飛ぶ。「好いね」と誰やら言ひ出せば「好いね」「好いね」と期せずして同ずる。同行七人今や大自然の廣げた大きな懷に飛び込んで思樣彼が呼吸に觸れるのだ。富も榮も野心も嫉妬も浮世の毀譽褒貶すべて超越し來つた此の身此の心は光風霽月鶉の毛で突いた程の蟠もない。ジツと仰いで居ると底のない碧空に深く深く引き入れられる様で擢の音がゴットン々と氣持よく枕に響くのだ。陸には海岸に沿うて蜿蜒と汽車が行く。「ヤーイヤー」一同舷を叩いて歡呼の聲を擧げる。もう全くの小供である天真爛漫である羽毛でも生れて天上へ昇つて了ひをうだ。二丁を出たのが八時半時計を見れば十一時近い。サア頑張れつと遮二無二漕ぎ抜けてやがて靜かな港内に入る。舟を纜つて宇土屋に御入り窮窟な服を脱ぎ捨て、打ちくつろいだドテラ姿、ウンと伸した右手に觸つた懷中時計不用意に取り上げ見れば十一時半を過る事正に三分、「オイ餘り無事過たなあ——」其の後へ直ぐ大津留中村二劍客の武者修業の首途を見送つて石川君と奥野君とが御出まし角帽に霜降見たいなオーバ石川君御自慢の鬚は大分黒くなつた様に見奉る。懷舊談やら繪端書あさりやらの中に短かい冬の日は暮れてひともし頃安居院村上三村川久保四君が見ゆる。舟の一行藤岡八幡屋太田天春田中上村加藤七君と合計十三名此に勢揃へが出來上つた。夜は石川君の歡迎會を催す。何が扮藝人揃の一行とてあらゆる妙技妙態をつくして拍手喝采笑聲の中に番組は進んで行く。先づ其の場の様を記さうなら皓々たる銀燭を前に見臺代りの蒼磐を据へ三枚襲の座蒲團は主待も顔である。大夫御出座とあれば幕に見立てた隔の襖がサツと左右へ開く、腹這つたり足投げ出したり蟠くま

たり勝手な聴衆の不行儀には頓着なく大夫殿は朗々と喉を絞つて歌をやる詩を吟する浪花節淨瑠璃何でも御座れ鳴物こそ無けれ黒人裸足だ。劍舞は孤軍奮闘が大方かうイヨウの大受である。踊と來たら其道の達人村上團十郎二君の舞ひ連るゝ花の姿は諸君の想像に委してわかう。三村君のは混み入つてゐる「○がかゝつて居るからね」と唯かゞ暗い袖の蔭で手様をする。ドクトルのナマイダ出でゝ興益々深く團十郎さんの飴屋ア―數へ擧ぐれば冬の夜長も更けて了はう。愈々出でゝ愈々妙に宇土屋の周圍は人垣が出來たと後で聞いて何だか面羞い氣がした。可笑しかつたのは查公が下へやつて來て宿のわかみさんを捕へ而して曰く「オイ二階の御客は藝者ごま上げちや居らんかい」へん馬鹿にしてらあ、出來るなら割つて見せたや此胸をだ。

十二月廿六日 安居院將軍は御用あつて歸郷送つて貰ふ筈のボートは如何したものか二時半になつても戻つて來ない。「何しとるだらう々」と言ふ中發車時間が迫つて來た。詮方なしと今は陸行の用意將軍は無錢旅行者より譲り受けたる履歷つきの藤の杖小脇に搔込み、昨夜は數々の重き書物を孕み今は空しく背と腹とベツタリ引つ付いた頭陀袋右の肩より左へぶら下げる。海風ソヨソヨと將軍の鬚髯を吹きズボンの裂目から白い裏地がチラチラ覗く。(西洋史にこんな事が書いてあつた。アツチラは短軀巨眼……………鬚あるべき處に僅かの鬚あり。風吹き來ればソヨソヨと搖ぐ云々一寸似て居る。)非番の連中は總出で將軍の御供して小春日のわつとりと照る海沿の道を辿る。其の中にもボートは見ねぬかど首を伸して向ふの島蔭を望めども來るのも來るのも漁舟のみで時間は迫るし田中上村加藤をボートが見ねたら呼びとめる様にと後に殘して駄足だ。將軍の腰にヒヨコヒヨコと踊る頭陀袋が一搖して岩を廻つて見ねなくなつてもボートは影だにない。茫然と石に腰懸け沖を眺めるのも可笑しなものだと田中君と加藤君と背後にヌツと突き立つた岩上りを始める。僅かな

凹處を手懸足掛に岩松を取るのだ。汗になつて取つた岩松を投げ下すとザラザラした粉土がペットリと頸筋に貼り付く。上と下とは「未だ見ぬぬなあ」「未だ未だ」言ふ様な會話を交換する。のたり／＼寄する波の響が嬾い。「オーイ」先刻將軍と共に駆けて行つた團十郎さんの聲がする。夏目流に言ふと其處へオーイと言ふ八春獨特の悠暢な調子を帯びた聲がのすそり閑と海風に送られて二人の上つてゐる岩につき當る。二人は一樣に振り向くと其長い手を眼鏡の光る顔の上に高く伸してオイデ／＼を二三度すると言つた様な具合、二人はスル／＼と迂り降りる。「將軍は?」「ヤツと間に合ひましたけん安心しなはれ」「ボートは?」「實際に待つとるけん早う駆足で行きましようや」手に岩松を恭しく捧げた儘四人は一氣に坂道を走せ上れば實際崎港の風光一眸の中に入り來つて日を照り返す波。黄金色に眩しい。汗拭ふ間もなく舟に乗り込めば、其ら合して!、フォア出した!、オールが浅いぞ!、港の寂寞は鋭い音調に破れるのであつた。あるひは彼方の灣にオール流して漂ひあるは此方の松翠濃やかな島影に舟を寄す。夕日を浴びて走る帆船の跡を追へば流れに乗りし舟は鷗の翼よりも輕し。鳴き連るゝ晚鴉に促がされて船首を轉すれば港はチラ／＼と点り初める灯に暮れて行くのである。今日の鍛はれ役は川久保田中上村加藤。ハタハタと翻へる遠航旗(新調)の下石川君の男らしい顔が浮んで居る。夜は小説に没入する者圍碁に耽るもの浪花節を怒鳴る者雜然たり騷然たり而して又超然として居る。他日白頭に呻吟する時拍手の興は蓋し此處等あたりから起るのでがなあらう。東京の薄田兄からの書信、打ち集いて繰り廣げた卷紙の上に短脚垢面の豪傑がヒロ／＼と躍り出す。一同短かい返事を書いた。

十二月廿七日 午前のはは石川、太田、川久保、田中、天春、上村、加藤、六時起床、満潮に近いが舟は横

に傾いて橋下砂上に居据の儘だ、潮の満つまでと打連れて海岸の逍遙、風が少し強い。兄らしい男が弟らしい若者を叱り付けて帆を上げてゐる。「コライ一寸加勢せんか」妻であらう髪も束ねればこそ乳呑子を背に負たなりで艫の方へ駈け付け弟の手助する。やがて程好く風を孕んだ帆を朝日に閃めかしつゝ遠く走り去る彼方には漫々の蒼浪を隔てゝ温泉が薄紫に聳む島原の大厦や白壁が蜃氣樓を見る様に波に浮んで居る。櫓柁子勇ましく歸來る漁船の二ツ三ツ唳々聲に大漁であらう重く沈んだ船は碧波を颯と白沫に碎く。島原通の汽船が黒煙一抹低く波に接して幽かに汽笛が聞える様に思へた。潮も七分通り満ちたので舟を出したが動搖して練習が出来ぬ。オールをつけ乍ら水面を見ると大自然の引く息吐く息に大うねりは小さい皺を刻む。沖からは風を避けて小舟が續きはいつて來た。余儀なく舟を赤石に一方を閉がれた灣内に漕ぎ入れる。少し狭いが波は無い。見上る島の顛に烈しき木々の戦ぎは風の刻一刻と加はるのを語つてゐる。疲れて憩い憩いて又漕ぐ。蜜柑の甘い汁も啜つた。透み切つた水を潜つて奇麗な小石の上に落ちてゆく黄色い皮を見詰めた。ドクトルの追分に島の若者が耳をそばだてゝ聞て居るのも見た。遅い様で針の歩は正確だ。ペコンの腹を抱へて宿へ歸る。直ぐ飯だ。風は益々吹き募つて雨さへ來そうな空模様一同暫し躊躇したが万五郎さんの發議で舟出に決定午前組は離れ離れになつた筋と骨とを温袍にくるんで晝寢となる。フラ／＼と目睡むだと思ふと連中勿々に逃げ歸る。御苦勞御苦勞、萬十郎さん眼鏡の曇を拭き乍ら「随分ひどいけん」と言ふ。聞けば赤石まで行つたら、雨に逢つたので引返したのだそうで今日は最早駄目だと怨めしそうな又嬉しそうな眼付で外面を見やる。重なり合た雲の隙間からテラ／＼と時々冬の日が覗く事があるが其の後に直ぐ細い雨がザーと來る。ジメ／＼した冷たい空氣が忍び込んで薄氣味悪く顔を撫でる。灯が點いて火鉢の傍に打

寄り四方山の話に花が咲いたが下婢が時々藤岡さんと呼びに来る。コリヤ怪しいと思つて居ると隣の室で何が狐鼠り物を並べてども居る様な氣勢が、何だらう？と思ふ中やがて間の襖が開けば三升入の大鍋にグググツと沸つて居たのは何？、曰く善哉！、此の不意打は歡聲を以て迎へられ、「チツトも知らなかつた」と言ふ度に万五郎さんの顔がニコリ／＼。

十二月廿九日 明くれば小止なく雨は風にさそはれて何處にでも勝手に叩きつけられる様な音をして降つて来る。此處に於て滯留説と歸校説とが持ち上つたが結局歸校説に軍扇が上り二時出發と事が決つた。雨の中のボート始末。ドテラを端折り外套を引きかけ薪を抱いて來て舟の支に爲る筈を借りて來て被とする大騷の後ヤツと片付いた。扱宇土屋に於る大正元年最終の晝飯となつた。國十郎さんは茶椀を差し出し乍ら「冷い處を」と注文する。此人は面白い人で何だか知らぬが或る奇妙な氣体を出した時は常に曰く「肥船か通るぞ／＼」雨甚しければとて人車を呼ぶ。五人分不足だが何あにガタクリでも膝クリよりは好からうと一臺の馬車を引つ張つて來て各適當に分乗の事よろしくあつてゴトゴトと走り出す。「デハ左様なら」「ハイ左様なら」「可憐なる大黒様、彼女の顔が常に莞爾として居る處より斯く呼ぶ宿の下婢君は親切に荒武者其の世話をしと呉れる。袖振合ふも他生の縁、幌に隔たりて見分かねど、いつになく悲しそうな顔をして軋り行く吾等が馬車の跡を見送つて居て呉れたに相違なからう。寂れた町、殆んど回送店に類した建物で持ち切つた街、いつも動かすにじつとして懸つてゐる小蒸汽のある港、廣い平坦な熊本あたりでは到底見られない大道、昔を語る大仕掛な石垣、大倉庫の剝落した壁。これらのものは憂々と馬の一步一步に遠ざかつて行くのだつた。

三角よ、宇土屋よ、鷗よ、さらば、さらば。

最後に一言。ボートは大正二年正月十八日無事廻航して來た、繪津湖には相變らず竹の垣が處々に立つて居て藻取船があの清冽な水を掻き廻しては濁らして居た。

三部遠航日記

川尻——島原——口ノ津——大門——馬場——高戸——日奈久——川尻——

腐つた濁り水に浸して掻きまぜるやうに、ごす黒い掌に揉まれてゐたものが、不意に日の照つてゐる明るい所へたつぽり出された時には、蘇生つたやうに嬉れしかつた、「不安の眠りに横はつた灰色の巨漢は、晴れやかな色彩の全く缺乏した冬の間我等を松林に圍はれた新寮に閉ぢ込めて置いたので、若やぐべき血も温うなつて行くのが堪まらなく苛立しかつた、

白木造りの新寮が水色に塗り換へられたは今年であつた、寮雨を降らす爲めに動かす窓の硝子戸がペンキからにかはづけられて困つたのも今年であつた、關の三本松は多大の同情を得て其の一本を伐られた如く、北寮との間に嬉れしく並んで居た五本松の二本は愛情に送られたのも今年であつた、伐株から今も新しい脂を吹く、炊事委員長寢室の掛札が取りはづされて、象のやうに足の膨れた人が坐つてゐる所となつたのも今年であつた、紅の唇を白うなる迄噛みしめて獅噛みついてゐた机から離れる事を許されると、我等は慙うした新寮に於ける「今年」を見捨てる時であるのだ、温かい黒潮は爽やかな香に包まうと待つてゐるではないか、可愛らしい聲を持つ鷗は馴染を待ち焦れて居るであらう、わゝ自由なる海よ、